

ありしかど、その自撰の句集は世に傳はらず。故に俳人北海なるもの、世に残れる北枝の句共を拾ひ集め、からうじて集録し、北枝發句集と名づけ、天保三年に上木せり。北枝が子孫ありしかど、はやく絶えたりしといへり。心蓮社の過去帳を見るに、左の如く記載せり。

享保三年五月十二日

法名廓趙北枝信士

新町剛屋彦三郎伯父

右の通りにて、此の外家族共の法名共も載せたり。されば北枝が家の菩提所なるに依りて、爰に埋葬せしもの也。今其の子孫絶えたりし故に、自餘の由緒・來歴等詳かならず。

○柳陰軒遺跡

此の遺跡は芭蕉の門人句空法師の庵室也。その地今詳かならずといへども、北枝墳の因みに爰に載す。俳家奇人傳(談)に云ふ。句空は加州卯辰山に閑居して、柳陰軒と號す。常に雅致ありて、蕉翁を師と尊ぶ故に、師翁も其深志を感じて、いつくしみ深く、養仲寺にて此の子の爲に兼好の畫賛して、秋の色糠味噌壺もなかりけり

とは殘されぬ。此の心は徒然草に、世を捨人は浮世の妄(まぼろし)を拂ひ捨て、糶汰瓶ひとつも持まじきといへる心をと、秋風零落の意を述べたるなり。初め翁この柳陰軒に旅寝の意を休めて、いと睦じくかたらひ、

散る柳あるじも我も鐘を聞

など詠じて立出でらるとぞ。平次按ずるに、右句空が卯辰山の柳陰軒に旅寝ありしも、元祿二年の秋、芭蕉金澤へ來着して杖を留められし時の事なるべし。句空法師が草庵集の自序に云ふ。十とせあまりのむかし、知恩教寺にてかしらおろし侍りて、

何に染む若葉の頃の太布衣

行脚の心ざしも、檜笠のしめ緒耳の根いたく、杵の襪あしくび疲れぬ。一とせばせを翁有磯めぐりの杖をしたひ、粟津野の草分て、風雅の筵をかたしく。日數經て山田の原におもむきぬ。其後は折々の文通のみ。今一たび山中の温泉・しらねの雪見にとちぎり給ひしも、難波の夢と成りにけり。やつがれ久しう眼目をわづらひ、庵にかままりて、今に墓前にひさまづく事もなし。函底に兼好の繪あり。是

に故翁の句ふたつあり。養仲寺にての吟なり云々。元祿庚辰春小雨のころ、加陽卯辰山下乞士句空述。と書載せたり。また猿丸宮集に、卯辰山にて、

庵はまだ陽氣ながらに谷の風 北枝

右庵も句空の草庵柳陰軒なるべし。卯辰集の句空が序に、我住かたの山の名にしおふ卯辰集といふなるべし。桑門句空書。と記載す。又交山秘集に、金澤眞言坊句空へ翁より文通の句のよし車大傳ふ。

羨し浮世の北の山さくら 翁

雪消えわたる細根大根 句空

人足のあたま敷へる春風に 去來

平次按ずるに、右芭蕉の發句も、句空卯辰山に隱遁して閑居せしゆゑに、浮世の北の山さくらとは詠吟して、殊に羨しとまでよまれたるならんか。但し此の交山秘集は後に輯録せしものなるがゆゑに、句空を眞言坊と誤り載せたるなるべし。

○永國山光覺寺

淨土宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開祖善等和尚、

高徳公越前府中御在城之頃、於府中就御深懇、天正年中加賀國へ御入部之頃、御跡を奉養金澤へ罷越、天正十二年十一月從原出羽守取次を以て、新御丸之内に於て寺屋敷千歩餘拜領被仰付、當寺建立仕處、其後瑞龍公御代御用地に被召上、松平伯耆を以て、鹽屋町龜淵にて代地先歩敷之通拜領被仰付。然處是又御用地に相成、寛永十三年山上町油木山之下にて替地拜領被仰付、其頃より油木山谷際千歩餘請込、寺内に仕置。とあり。右由來書の寫共に、金澤へ初て來り、新丸之内に於て寺地賜る事を、天正八年と載せたり。

但し其の本書には十二年とあり。八年とあるは傳寫の誤なるべし。又當寺の本尊阿彌陀の立像は、俊寛僧都の守本尊なりとぞ。又山號永國山の類は、後西院天皇の皇女寶鏡宮の御筆なりとぞ。按ずるに、後西院天皇皇女寶鏡宮と申すは、紹運錄に第十一皇女寶鏡寺皇女。法名理豐。寛文十二年五月廿六日誕生。稱極宮。天和三年四月廿一日入室。同年十一月十四日得度。延享二年五月十二日薨。七十四歳。號本覺院宮。とあり。

○光覺寺寺中兩院